

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20330143

研究課題名（和文）ナラティブアプローチによる治療的意味生成過程に関する研究

研究課題名（英文）Study on the meaning genetic process in the psychotherapeutic conversation from the narrative based approach

研究代表者

森岡 正芳 (MORIOKA MASAYOSHI)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：60166387

研究成果の概要（和文）：本研究は治療的会話としてのナラティブアプローチの特徴を、セラピーに固有の関係性の質という観点から明確にし、臨床的適用の可能性を探ることが目的である。そのために関係性および時間要因、そして社会文化的文脈の要因に注目し、臨床のフィールドに生じる治療的会話のミクロな分析と、関係場の特徴を把握する。そしてクライアントの談話におけるライフヒストリーの変化との関連をとらえる。これによって治療的会話に生じる新しい意味生成が、自己の再構成をうながし、自己物語（パーソナルナラティブ）の再編へとつながる過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to make the concept of narrative based approach clear from the viewpoint of the quality of the psychotherapeutic relationship and to research the clinical potentiality of this concept. For the sake of this aim the research group takes focus on three fields, interpersonal relationship, temporal and social-cultural context. One part of the study group takes up the micro-genetic analysis on the therapeutic conversation generated in the clinical situation. Another part describes the informants' life histories. The research group tries to connect these micro and macro personal narratives. In this research the group makes clear the process of therapeutic meaning genesis and the re-authoring the personal narratives. This process facilitates the reconstruction of self.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2008年度 | 4,200,000  | 1,260,000 | 5,460,000  |
| 2009年度 | 3,400,000  | 1,020,000 | 4,420,000  |
| 2010年度 | 3,300,000  | 990,000   | 4,290,000  |
| 2011年度 | 3,100,000  | 930,000   | 4,030,000  |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 14,000,000 | 4,200,000 | 18,200,000 |

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理療法 質的研究

キーワード：ナラティブ 心理療法 意味生成 質的研究

## 1. 研究開始当初の背景

ナラティブアプローチは、人は生きている現実を積極的に構成し意味を作り出す存在

であるという人間観が背景にある。生きている現実から素材を選択し、その場の文脈に応じてつなぎ、まとまった言葉にしていく行為

がナラティブである。ナラティブアプローチは個人の具体的現実接近し、個人を生きていることの連関においてとらえようとする。ナラティブには評価、意味づけ、解釈がつねに含まれる。そのような意味づけは、聞き手とのあいだで成り立つ関係性と、社会文化的文脈によって積極的に構成されていく。

ナラティブ（物語・語り）という言葉は、心理療法の実践及び研究場面に限定したとしても実にさまざまな使い方がなされている。ナラティブの視点は、一般的言明ではなく、当事者が自分の言葉で語ることから出発する。意味の生まれる現場性と、人の具体的な発話を大切にするという点で共通している。

臨床的聴取による積極的な意味構成と自己を作り替えていく力を協働的に生むことこそが、ナラティブアプローチに共通の基盤であるし、また研究上の注目点となる。ここで意味や自己の構成、再構成といった言葉がよく使われるが、それはどういう事態を指すのであろうか。そもそも物語が自己や意味を構成するとはどういうことか。この問題はナラティブアプローチの根底に関わる問題でありながら、まだ十分に解明されているとはいえない。しかし、対話的關係場において生じる変化を的確にアセスメントしていくことは、心理療法の学派の違いを超えて取り組むべき課題である。

研究グループはすでにナラティブの心理療法への基礎づけをおこなうために、生活場面および臨床場面での会話を徹底的に分析し、治療的会話を通じて意味の生成や自他に対する評価の変化のプロセスを検討し報告を行ってきた。セラピーに関わって、以下の点がこれまでに明らかになった。

(1)保健医療看護領域も含む臨床実践研究において、ナラティブという概念がどのように用いられているかを整理検討し、共通要因を抽出した。ナラティブのどの側面に重きを置くかは論者によって違うし、また臨床場面での対象のちがいで、ナラティブという概念自体も変化しうることを解明した（森岡2007；吉村・紙野・森岡2006）。

(2)小さなプロット（little plot）のはたらきに注目し、カウンセリング対話を分析した（森岡2005）。会話において新しい産物（new outcome）が生じる契機となるのは、対話關係のなかで他者の視点をくぐり、自己の発話の意味をとらえ直すことである。語り手が自分の言葉を「内的に説得力のある言葉」（Bakhtin1996）として、受け取ることに治療的な意味がある。

(3) 行為としてのナラティブによって、語り手の主体感覚を支えることができる。対話者双方に観察主体を育て、自己内対話を生む。そこで問題を外在化する視点を得る。

(4)ナラティブにおける聞き手の積極的なはたらきをとらえた。聞き手が積極的な会話を維持し、語り手と聞き手が協働的に現実を構成する。聞き手がとらえたものを含めてのナラティブ記述に意味がある（吉村・紙野・森岡2007；森岡2006）。

今後の研究として、より大きな枠組みの中で、ナラティブ視点の臨床実践可能性を探る必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究は治療的会話としてのナラティブアプローチの特徴を、セラピーに固有の關係性の質という観点から明確にし、心理療法における治療的意味生成のプロセスを明らかにすることが目的である。

## 3. 研究の方法

ナラティブが新しい意味を生み、自己の再構成へとつながるはたらきをとらえるにあたって、会話の担い手たちの關係性および時間要因、そして社会文化的文脈の要因をとらえ分析した。

(1)ナラティブが新しい現実を生むときの対話的關係場の特徴を明らかにする。

ナラティブアプローチは意味づけ、解釈優位で物語を紡ぎ出すことが目標のように誤解されるが、セラピーでは、むしろ意味づけや解釈を急がず、その場で生じてくる変化、体験、現実を見つめ、共体験することに力点が置かれる。心理療法のいくつかの効果研究によって、各セラピーの技法による差よりも、情緒的な交流を含む安心感のある關係こそセラピーの効果に大きく関わり、それがセラピーの共通要因となることがわかってきた（Lambert2000, Wampold2001）。

この研究では關係の言語としてのナラティブの特徴に注目し、コミュニケーション論的視点を導入した。多様な臨床場面において、援助的—治療的關係が生まれるとき、援助者、セラピストは關係場に生じるパラメッセージ（para-message）のどの部分からナラティブを読み取り、關係の維持につないでいかをとらえた。

(2)ナラティブにおける時間構成のはたらきを明らかにする。

ナラティブは時間的継起、プロセスを描くのに有効な形式である（土居1977）。語りの形式は出来事と出来事をつなぎそこに継起的關係をつくる。關係の言語としてのナラティブは時間軸上では対話的自己の運動においてとらえうる（Hermans1992）。過去の自己と現在の自己がセラピーの關係場の中で対話を生む。ハーマンスの自己直面法（confrontation method）を用いて、対話的自

己の生成過程について厚い記述を行った。これによってクライアントが対話を通じて自己内関係を育み、観察主体を生み出すプロセスがとらえられた。

(3) ナラティブによる意味生成プロセスを社会的文化的文脈のなかで精密にとらえる。

ナラティブは空間を確定し、その中に時間的継起を生む。空間と空間をつなぐものとしてナラティブが生まれ、よりマクロなクロノトポス（時空間）が形成される。クロノトポスは異なった意味領域が混交し合う場でもあり、意味生成と可能性の場となる。複線径路・等至性モデル（サトウ&Valsiner2006）により、生活の場での社会的文化的文脈に即して、ナラティブの再編へといたる複数の筋道を追跡し、ナラティブアプローチのセラピーとしての特徴がとらえられた。

#### 4. 研究成果

(1) 3つの研究グループに分かれ、それぞれにおいて、ナラティブアプローチに関わる内外の文献を収集し、内外の実践研究者との情報交換を行い、ナラティブアプローチの臨床実践領域における理論を整理した。

研究グループ1は医療人類学と文化心理学における社会的構成主義の立場でのナラティブ概念について、研究グループ2はNBM(Narrative Based Medicine)におけるナラティブ概念の理論的基礎づけを行った。研究グループ3は、ライフストーリー研究法や質的研究の分野でのナラティブ概念について理論的な基礎づけを行った。

その結果、ナラティブ概念について、

①個人の生の文脈や世界観のなかで出来事が意味づけられ物語性が構築されるという意味でのナラティブ。

②治療的会話の微細部分に、発話主体の意味行為の働きをとらえ、事実内容を語りなおしていく行為の遂行に関わるナラティブ。

以上の二つの群に分類可能であることが確認された。

(2) 3つの研究グループはそれぞれのフィールドにおいて、ナラティブのマイクロ分析のための資料収集を行った。各フィールドで収集された会話資料をもとに、ベイトソンのコミュニケーション論の観点から、関係レベルのメッセージをまず詳細にとらえ、内容レベルでのメッセージとの照合を行った。

以上を通じて、ナラティブにおける素材（対話におけるテーマ）とナラティブの行為との間に生じる差異に着目し、語り手（クライアント）が自己を再構成する契機をとらえることを試みた。とくに、過去の自己と現在の自己がセラピーの関係場の中で対話を生むという治療的契機について、対話的自己論

による分析を行った。

(3) 人生の長いスパンを含むパーソナルナラティブが、社会的文化的文脈のなかでどのように形成されるかについて取り組んだ。すでに研究グループの各フィールドにおいて当事者たちのパーソナルナラティブを聴取し、分析を行った。生活場面において生じる治療的会話がパーソナルナラティブを動かし、ナラティブの再編へとつながるはたらきに焦点をあてた。障害者とその家族、不登校体験者とその家族など当事者たちのライフストーリーを聴取し、資料を蓄積した。資料を断片化せず、個人の体験の現実に沿ってエピソードを描くことに留意した。

以上の成果については国際学会を含む5つの学会で発表を行った。

(4) 以上の各研究から総括すると、

①パーソナルナラティブは、体験の現実理解に資する物語的な因果関係の構造を基本的にもつが一方で、直線的因果関係ではとらえられない個人の行為を生み出すメタ的なはたらきがある。この結果はベイトソンの「関係の言語」としてのストーリーという着想を裏付けるものである。

②ナラティブは空間を確定し、その中に時間的継起を生む。さらに空間と空間をつなぐものとしてナラティブが生まれ、よりマクロなクロノトポス（時空間）が形成される。クロノトポスは異なった意味領域が混交し合う場でもあり、意味生成と可能性の場となる。クロノトポスは動的な時空間である。ナラティブがたえず再構成される場である。以上の成果について、意味生成の場を「間」という概念でとらえなおし、第6回対話的自己論国際会議にて発表を行った（2010年9月30日アテネ）。歴史文化に根ざした知に関わる議論を喚起した。

③ナラティブの視点は当事者の現実を描くことにおいて優れていることが示された。物語から浮かびあがってくる個人の生きていること具体性、真実性、それによる説得力こそがナラティブアプローチの存在価値を示すが、一方でナラティブの物語性にしっかり足場を置くことが、臨床実践において意味を持つ。今後の課題として生活史の方法を歴史文化に根ざす形で、洗練させていく必要があることがわかった。グリーンハルら（2004）のリメンバリングの実践と重なる課題であり、医療場面で対話と意味の生成に関わる現代的テーマとつながるものである（大月2011；森岡2012）。

また今後の課題として、分析心理学の立場でのナラティブ概念とくに、能動的想像法や夢解釈におけるナラティブの探求と成果と照合し、検討することが必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件) (総計 23 件)

- (1) 森岡正芳 リメンバリング—喪失と回復の物語—, 精神療法 38-1, 40-45, 2012 査読無
- (2) 廣瀬幸市 治療的コミュニケーションとしてのナラティブ. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 第 2 号 9-18, 2012. 査読有
- (3) 森岡正芳 緩和ケアにおけるナラティブ・ベイスト・リサーチ、緩和ケア 21-3, 285-289, 2011 査読無
- (4) 岸本寛史 身体と言語とカルテ: 言語化とカルテ N: ナラティブとケア 2, 58-64, 2011. 査読無
- (5) 野村直樹 フィールドノートから考える医療記録. N: ナラティブとケア 2, 73-83, 2011. 査読無
- (6) 山口智子 高齢者のライフレビューに関する研究と実践—語りを理解する 2 つの視点と日常場面への展開—自己心理学研究 4, 1-17, 2011 査読有
- (7) 森岡正芳 一人の障がい者の中で私たちは—当事者の視点をめぐって— 発達 123, 76-82, 2010. 査読無
- (8) 岸本寛史 緩和医療における痛みの語り. N: ナラティブとケア 1, 28-34, 2010. 査読無
- (9) 森岡正芳 対話空間を作る—インタビュー実践としてのセラピー— 質的心理学フォーラム 1, 45-56, 2009. 査読有
- (10) 岸本寛史 投影法とナラティブ. ロールシャッハ法研究 12, 51-58, 2009. 査読無
- (11) 野村直樹 「物語としての時間 D 系列の時間が奏でるポリフォニー(多声楽)」 ブリーフサイコセラピー学会 17-2, 116-122, 2009 査読有
- (12) 森岡正芳 物語論から神話の心理学へ臨床心理学 8-1, 35-40, 2008. 査読無
- (13) 野村晴夫 自己を語ることと想起すること: 心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索心理学評論, 51-1, 99-113. 2008. 査読有
- (14) 森岡正芳 想起・回復・現実構成—心理学評論 51-1, 114-119, 2008. 査読有
- (15) Morioka, M. Voices of the self in the therapeutic chronotope: Utushi and Ma. *International Journal for Dialogical Science* 3-1, 93-108, 2008. 査読有

[学会発表] (計 12 件) (総計 18 件)

- (1) 森岡正芳 佐藤達哉 野村晴夫 野村直樹 中間玲子 山口智子 ナラティブ・ベイズド・リサーチの可能性—日本心理学会ワークショップ 2011 年 9 月 15 日 日本大学
- (2) 森岡正芳 岸本寛史 廣瀬幸市 山口

智子 野村晴夫 ナラティブアプローチから心理療法へ—日本心理臨床学会第 30 回大会 自主企画シンポジウム 2011 年 9 月 2 日 福岡国際会議場

(3) Kishimoto N., Hirao K., Narita K., et al The Unconscious Body Image and Dreams derived from Internal Physical Source. The 10th International Neuropsychoanalysis Congress. 2011. 6. 26. Berlin

(4) 山口智子 DV 相談における支援者の「語り」—過酷な体験の語りを聴くことによる心理的影響—, 日本発達心理学会第 22 回大会ポスター発表 2011 年 3 月 26 日 東京学芸大学

(5) Morioka, M. “Constructing the double dialogical space “ 6<sup>th</sup> International Conference on Dialogical Self, 2010. 9. 30 Athens, Greece

(6) 中間玲子 2010 日常における自己嫌悪感の生起と変化—インタビュー調査による探索的研究— 日本教育心理学会第 52 回総会 2010 年 8 月 28 日 早稲田大学

(7) 森岡正芳 「ナラティブアプローチを学ぶ」日本心理臨床学会第 29 回春季大会ワークショップ 2010 年 5 月 23 日 大妻女子大学

(8) 森岡正芳 「時間とプロセスをとらえる質的研究」サトウタツヤ 森岡正芳 企画「時間とプロセスを捉える質的研究のあり方を大いに語る」日本質的心理学第 6 回大会自主シンポジウム 2009 年 9 月 13 日 北海学園大学

(9) 森岡正芳 「物語と現実: ナラティブ概念のコアとは」日本質的心理学第 6 回大会準備委員会企画シンポジウム 2009 年 9 月 12 日 北海学園大学

(10) 森岡正芳 『かたり』と学生相談: 語る力・聞く力—日本学生相談学会第 27 回大会学会基調講演およびシンポジウム 2009 年 5 月 25 日 津田塾大学

(11) 岸本寛史 沈黙の多面性—第 27 回日本心理臨床学会 2008 年 9 月 5 日 筑波大学

(12) Hirao, Naka, Narita, Futamura, Miyata, Tanaka, Hayashi, Kishimoto Self in Conflict—Recovery from non-fluent aphasia through sandplay therapy. The 8th International Neuropsychoanalysis Congress 2008. 7. 28 Canada

[図書] (計 8 件) (総計 11 件)

- (1) Jones, R.A. & Morioka, M. (ed.) *Jungian and Dialogical Self Perspectives*. Palgrave/Macmillan, 2011. 総頁 237 頁
- (2) 『ナラティブ・メディスン』R. Charon 著 斎藤清二・岸本寛史・宮田靖志・山本和利訳 医学書院 2011. 総頁 266 頁
- (3) 野村直樹 遠見書房『ナラティブ・時間・

コミュニケーション』 2010. 総頁 154 頁  
(4)金井寿宏 森岡正芳 高井俊次 中西真知子編 ナカニシヤ出版『語りと騙りの間』 2009. 総頁 233 頁  
(5)『ナラティブ・ベイスト・メディスンの臨床研究』 T.Greenhalgh B.Hurwitz V.Skaltans 編 斎藤清二、岸本寛史、宮田靖志監訳 金剛出版 2009. 総頁 313 頁  
(6)岸本寛史 氏原寛編 新曜社『心理臨床の広がり』 2009. 総頁 146 頁  
(7)森岡正芳編 金剛出版『ナラティブと心理療法』 2008. 総頁 246 頁  
(8)野村直樹『やさしいペイトソンーコミュニケーション理論を学ぼう』金剛出版 2008. 総頁 175 頁

(3)連携研究者 なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

森岡 正芳 (MORIOKA MASAYOSHI)  
神戸大学・人間発達環境学研究所・教授  
研究者番号：60166387

### (2)研究分担者

野村 直樹 (NOMURA NAOKI)  
名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授  
研究者番号：80264745

佐藤 達哉 (SATO TATSUYA)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：90215806

岸本 寛史 (KISHIMOTO NORIFUMI)  
京都大学・医学系研究科・准教授  
研究者番号：90397167

山口 智子 (YMAGUTI SATOKO)  
日本福祉大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：00335019

野村 晴夫 (NOMURA HARUO)  
大阪大学・人間科学研究科・准教授  
研究者番号：20361595

廣瀬 幸市 (HIROSE KOICHI)  
愛知教育大学・教育学研究科・准教授  
研究者番号：10351256

中間 玲子 (NAKAMA REIKO)  
兵庫教育大学・学校教育学研究科・准教授  
研究者番号：22730499